The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	対人コミュニケーションの社会性
Author(s)	大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2001, 1, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10003
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究,2001 年,第 1 号,1-16.
JapaneseJournalofInterpersonalandSocialPsychology,2001,No.1,1-16.

対人コミュニケーションの社会性

大坊郁夫（大阪大学大学院人間科学研究科）

人は継時的な意味を含めて複層的な対人関係を多くの媒体を持ちながら展開している。そして、心的メッセージを社会的規範や文化的事実を反映したコミュニケーション行為として理解するよう試みている。非言語的コミュニケーション研究は身体部位に由来するチャネルとしての用法の理解から相互の関連性を理解する機能的統合へと進展してきた。対人コミュニケーションは、個人間の社会的交換による強化的行動の連鎖として、および個人を統合する単位である対人関係を指向する認知的均衡への過程として考えられ。均衡状態は必ずしも最終的な定常ではなく不断にさらなる安定した段階を目指す。また、個人内均衡と対人的均衡の合理的関係についての検討をさらに要する。この均衡の二重性とともに、いくつもの非言語的チャネルで同調傾向の存在が確認されていることは、「社会性」を考える上で重要な構造的、要素的アプローチの議論をさらに喚起するものであろう。

キーワード：対人コミュニケーション、認知的均衡、社会的交換、社会的スキル、同調傾向

媒介されるメッセージと対人関係

対人関係は、自他の存在を共有した識別的な単位を築くことである。それは、無媒介に形成されるのであろうか。人は自分の感情や考えを何らかの方法によって他者に伝え、また、その相手からの反応を解読し、自分の意図と照合させ、対人関係を運営しようとする。メッセージは決して直接伝達されるものではなく、特定の個人の暗黙の規則、そして下位文化や上位の文化に由来する規範に基づいて共通性のある信号によって行われる。しかも、その信号自体は他者との相互作用を通して具体的に形成され、変容される性質を持っており、伝えられる意味も単一とは限らない。相対的で意味の境界に重なりを持ち、変動するものであるがために、信号は対人関係を含む社会的脈絡と関連させて繰り返し比較され、意味の照合を要するものである。

社会的な行動をその動機面からすると、自分の経験を優先し、そのコストを最大限に見積もることが人間の基本的な性質と言えるであろう。さらに、人間の行動は常に変化し、自分のおかれている環境に影響され、適応していこうとする。低次の反射的な行動以外には、他者指向の機能が含まれていると言える。社会的促進、社会的手抜きの現象、Rosenthal(1966)らの実験者効果の例などに端的に表れているように、他者の存在自体がわれわれの行動に影響を及ぼすものであると考えざるをえない(後述する同調傾向もこの例と言える)。個人が含まれる「社会」自体が自律的な全体性を持ち、個別の作用する要素には分解できないとする予定調和的な、運命として表現する構造的視点もあるが、行動主体からすると、このような全体性を俯瞰することには限界があろう。

他者との関係において、自分との違いを前提としたところから、緊張が発生し、行動することを促す。そして両者の理解が一致する行動が展開され、安定した状態を築こうとする。この基本方針の下に、なんらかの媒介的な手段(チャネル)を用いてメッセージの交換を行う必要が生じてくる。このような過程を通じて形成された両話者の保有する情報量、表出された関心や影響力の対比を対人関係と表現していいであろう。

伝達の階層性

対人関係で媒介されるメッセージの伝達性に着目して、Ekman＆Frisen(1969)は、個人にのみ意味を持つ(idiosyncraticmeaning)非言語的行動と他者と共有できる意味を持つ(shared meaning)非言語的行動とに分けている。前者は、同種の環境や刺激条件において生じるものであり、後者は個人を越えて成立する一般的な意味を持つ行動である。さらに、記号化と解読の過程における特徴を考え合わせて、3種類の行動を区別している。第一は、特定の一人にとどまらず、複数者によって類似の解釈がなされる行動で、これを「情報的(informative)」非言語的行動と名づけている。解読の一般性があるというものであるが、その行為が意図的に記号化されることを必ずしも意味するものでもなく、送り手についての正確な情報を伝えるものとも限らない。第二は、「伝達的な(communicative)」非言語的行動である。送り手が意図的に受け手に特定のメッセージを送達する行為である。解読上の意味を共有する情報的行動は意図的な記号化によるものではないので、その多くは伝達的ではない。伝達的な行動は記号化の意図を問題にするものであり、解読上の意味を共有することを前提としない。第三は、「相互作用的な(interactive)」非言語的行動である。これは、相手の行動に影響を及ぼそうとしてとられる行動である。相互作用事態において、両者が互いにこの行動をとるならば、送り手の行動を解読する受け手は相手と同様な仕方で反応するので、情報的で、かつ相互作用的である。行動の影響が一方のみに働くのであれば、その行動は特殊で相互作用的なものと言える。このような区別をすることによって、交換されるメッセージの意味を記号化と解読、意図性の点で整理し、相互作用の脈絡に応じて考えていくことができる。

この見解には、コミュニケーションを要素・連鎖的に捉える視点と要素に分割しない構造的視点が含まれていると見なすこともできよう。

即ち、メッセージを搬送する要素が連鎖するとする視点からすれば、メッセージは先ず個人に固有な意味を持ち、それを表すコミュニケーション行動が特定のメディア・チャネルを介して伝えられるので、いくつもの段階で意味の拡散が生じやすく、情報として組織化されがたい水準にとどまりやすいので、相互作用的な行動は多大なエネルギーを要する困難なものとされる。なお、個人、関係、因果的な時間性、要因相互の関連性を扱うことはできる。一方、構造的視点に立つと、コミュニケーションの成立する場は要素として分離できない全体性を持つものであり、意味の共有は前提となり、記号化と解読は不可分の相互作用的行動となる。コミュニケーション送受信者を分離せず、「場」のなかで行われるダイナミズムを一種のエネルギーの偏在、流れとして捉えることになる。現象としてのコミュニケーションでは説明し難い、察知、以心伝心的な了解などは、このような場という関係とメッセージの蓄積によるエネルギーの偏在として考えることもできよう。

メッセージを伝達する「身体」

他者に対する何らかの意図・メッセージは、音声や身体などの媒体(メディア)を通して特定のチャネル―発言、視線、手足の動作など―に表される。与えられる意味の如何を問わず、文化を超えてコミュニケーション・チャネルとして用いられる。身体自体、コミュニケーションを送受信する共鳴装置とも言えよう。しかし、チャネルに応じた伝達特性の違いは否定できないが、同一のメッセージを同じチャネルで伝えるという普遍性は高くない。しかも、使用媒体は場面依存であり、意図を超えて限定されやすい。一般に使用可能なチャネルには敏感であり、伝達の意図が過度に強調されたり、時には歪曲されることもある。多くのチャネルを使用できる対面的場面では、メッセージが複数のチャネルに分配されて表出される傾向がある。したがって、一般的にはチャネルの特性を踏まえて併用することによって非対面的場面に比べて効率の良い伝達がなされやすい。

人類による人為的な伝達－意味の理解を促す方法として意識される言葉への注目、およびそれによる社会的同一性の高さがある。それを踏まえて、伝統的には言語的、非言語的コミュニケーションという分類がある。言語的コミュニケーションは、シンボルとしての言語を用いてメッセージを伝えることであり、意図的で、伝達の語義、内容が問題になる。言語使用に意味されるように高度な抽象性があり、伝達内容の包括化がなされるので、言語圏を異にする文化間においては、伝達効率は低い。これに対して、非言語的コミュニケーションは、多くの下位チャネルを含んでいる。例えば、Duncan(1969)は、動作的行動である身体運動(姿勢、身振り、顔面表情、視線の動きなど)、近言語(アクセント、声の大きさなど)、プロクセミックス(対人距離、身体の延長としての個人空間)の他にも、嗅覚、温度や触覚など感覚の感受性、人工物の使用(服装、化粧など)をもチャネルとして列挙している。これらは、具体的な相互作用に随伴しており、逐一の交換的対応が観察されやすく、感情的伝達、無意図的で、自動的な行為であることが少なくない。前者に比べて通文化的でもある。

なお、言語的、非言語的コミュニケーションという分類は、伝統的に用いられてきたものであり、現象として観察されやすい身体部位に依存するチャネルに即したものである。確かに、顔－顔面表情、眼－視線、口－音声、手足－動作などの対応はあり、それぞれが担う機能も概ねの範囲にあると言うことも可能ではある。しかし、コミュニケーション自体はその人の心的エネルギーであるメッセージを伝えることであり、決して身体部位独立の働きをするとは限定し難い。メッセージ送信において身体は全体的に機能すると考えることが必要である。したがって、特定のチャネルに着目したシングル・チャネル・アプローチは、身体部位を独立的に捉えたものであり、メッセージ伝達を部分的に誇張した視点に立っていると言えよう。本来、人が社会的であるための基本単位である身体自体に由来する社会性を反映するコミュニケーション指向を考え、各部位、部位間、部位を超えた「コミュニケーションとしての身体の重層性」(菅原,1996)を再認識する必要がある。

現象説明から機能への注目

対人コミュニケーションは、多数のチャネルを用いることによって成立する。しかも同一のチャネルであっても社会的脈絡において異なる意味を持ち得る。したがって、身体部位に由来するチャネルを識別の根拠とするアプローチでは十分ではない。そこで、チャネル間の関係、相互作用事態で果たす役割を探ろうとする視点が登場してきた。視線活動と対人距離との相補的関係の発見から、Argyle ら(Argyle & Dean,1965;Argyle & Cook,1976)が提出した親密性平衡(intimacy equiliburium)モデルにその端緒を見出すことができる、マルチ・チャネル・アプローチによる機能分析がある。その基本的視点は非言語的行動の由来などに着目した Ekman&Friesen(1969)の機能分類の発想に求めることができる。これに対して、Patterson(1976,1983)は、社会的相互作用において伝達される対人的な効果に着目した機能論を展開している。相互作用の成分に関する情報伝達、相互作用の調節の機能、そしてより相互作用全体に関わる機能として親密さの表出、社会的統制の実行、サービスや作業目標の促進を挙げている。非言語的行動の機能を問題にすることによって、Argyle らのモデルに一見矛盾するかのようなチャネル間の相互性(reciprocity)を示す結果も、そして、状況に応じて話者間のコミュニケーション・パターンが近似していく同調(synchrony)傾向(後述)を示すチャネルに違いのあることなども考えることができる。

さらに、Patterson(1982)は多段階機能(multistagefunctional)モデルを提出している。コミュニケーション行動の交換過程のみを観察の対象とするだけでは、社会的相互作用の全体を把握しきれない。コミュニケーションの機能を始め、相互作用の前提諸要因(個人属性、対人関係、場面など)を含めて広

範囲な視点を要する。

非言語的コミュニケーションの機能について、Patterson(1983)は、以下を挙げている。

①情報の提供(伝達したい事物のカタチや大きさを宙に描いて示すなど)、

②好意を表わすなどの親密さの感情表出(好意伝達のために相手を見つめる、近い席に座るなど)

③発言の交替を促すなどの相互作用の調整(会話事態で、話し手に向かって自分の発言の意図を自分の身体の向きを相手に向け直したち、咳払いで示すなど)、

④社会的コントロールの実行(地位に応じた勢力の行使、相手を説得するなど)、

⑤社会的役割に基づくサービスや作業目標の促進(職務により他者の身体に触れる、儀式的な会話など)

このうち「親密さの感情表出」は、人と人の結びつきの基礎をなすものであり、「情報の提供」は、対人的な働きかけの過程における中心的な働きをなす。⑤は、様式としてはメッセージの交換が行われるが、個人的意思の入らない、予定されたメッセージの交換である。

なお、MacKey(1972)は、送り手(受け手)のメッセージ送信(受信)の意図性に着目している。意図的な送信が意図を持ったメッセージと解読されるとは限らず、無意図的な行動が意図を持ったメッセージと解読されることも少なくない。この指摘は、コミュニケーションの機能を問う以前にコミュニケーション行動自体への感受性、送受信のスキル自体の問題を提起している。即ち、上記の「機能」は、目標指向的コミュニケーションが目標指向的と解読された場合に意味をなすが、それ以外の場合には、一方の意図のみが独立して作用することになり、決して対人的相互作用とはならない。もちろん、このような意図の乖離が生じる場合をも、マクロに言えば、それを招来した経過を含めて「相互作用的」と表すことはできるが、対人関係の主眼ではない。時系列的に見れば、そのコミュニケーションを開始する時点までの両者双方についての知識、保有するコミュニケーション・スキルがこのような意図性の問題を生じる。

均衡を指向する

対人コミュニケーションは、自分の属する社会的環境に最大限に調和することを前提として、メッセージを交換しようとする意図の基に成立する。元来、メッセージの伝達は、両者の間で一致していない情報や態度についての落差を埋め、保有する情報量を両者が一定に保つことを目指して行われる。しかし、同一集団内の他者との関係においても、あえて一致しない概念や期待を持ち、一時的な不均衡、緊張を求めることもある。それは、社会的アイデンティテイとしての集団への所属性を維持しようとする一方で、個人としてのアイデンティテイを持とうとする拮抗した心理性があるからにほかならない。したがって、このような葛藤は、中核的な内集団にある場合、あるいは外集団事態では生じ難いであろう。

ある時間幅で観察するならば、なんらかの目標に向かう過程においては、行動を促す動因を要する。目標に達することは、一連の過程において、その緊張を解消し、心的に安定した状態を得ることになる。しかし、安定するためには、ある量のエネルギー充足が一定時間維持される必要があり、充足か否かの判断は継時的に遅延する。それ故、充填された心的エネルギーは、必ず過飽和となる期間がある。それを、時系列的に表現すれば、ある定常状態からさらに上位の定常状態を求める準備状態をつくることにもなる。

人は、時間の連鎖の中にあって、過去・現在・未来の連続性を理想的に追求するがために、均衡への強い志向性を持っていると言える。このことについては、Heiderの個人的な認知系(individual system)やNewcombの対人認知の集合系(collective system)についての諸研究からも多くの証拠が得られている。個人的認知系と集合系のメカニズムは、個人内過程と対人的な過程の結びつきを理解でき

るインターフェィスとも言える。即ち、個人内均衡と対人的均衡がともに目指されるが、そのダイナミズム自体に求められる均衡(個人内均衡へのコミットメントと対人的均衡へのコミットメントの二重の比較による)を発見することである。

対人的な葛藤状況では、その解決の仕方は一通りではないが、相手との結びつきを指向する限りにおいては、その解消を試みる。相手が表出した記号(code)から、相手の意図を推測する。その結果を踏まえて、相手の解読の特性をも推測しながら、一定のメッセージを伝えようと試みる。自分の属している環境を不均衡なものから均衡した状態へと変えていくためには、このような相互的なコミュニケーション行為を続けていく必要がある。HeiderとNewcombの見解の最大の違いは、後者が対人的な不均衡を解消し、緊張を低減させるために不可欠な要因として、対人コミュニケーションを取りあげたことである(Newcomb,et.al., 1965)。相手からのコミュニケーションを経ることによって、相手の具体的なオリエンテーションを知ることができる。換言すれば、コミュニケーション行為を考慮したことによって、均衡理論は、対人性－"interpersonal"を扱う理論となったのである。なお、認知的な不均衡、対人的緊張があると、緊張を解消するために、コミュニケーション行動が促進されることは種々確かめられている(Taylor, 1970; 大坊,1986など参照)。

対人コミュニケーションは、相互作用する者の個人的属性、個人間の関係、そして、場面などを含む環境を主たる要因としながら、各要因間の高度な交互作用に大きく依存するゲシュタルトをなしている。

コミュニケーションの螺旋的連続性　－　あいさつ行動

あいさつは,会話開始の導入を作るものである(大坊,1999)。知り合いに会えば,相手との親しさに応じて、まず視線を向け,相手に気づいたことを示すことに始まって、会釈、「おはようございます！」などのステレオタイプなせりふ,手を軽く挙げる動作などのあいさつをする。視線は相手とのつながりを求め,受ける第1段階のコミュニケーションなのである。もし相手が自分に気づいても視線を避けるしぐさを示したら、相手はたとえ短時間の時候のあいさつであれ,つながりをもちたくない。そんな相手に話しかけてもきっと快適な気分にはなれない。

Kendon & Ferber(1973)は、様々なパーティ場面でのあいさつ行動の推移を分析している。それによると、1)遠くからのあいさつの段階(相手の存在を認め、手を振るなど)、2)接近と準備の段階(視線を外したり、身づくろいしながら近づき、しだいに視線を合わせ、微笑み、一定の距離をとり、手を差し出す)、3)近づいた段階(時候のあいさつなどの常套的なことばの交換をし、握手や抱擁などをする)、4)密着した段階(しだいに個人的な内容の会話をし、最近の出来事などを話し、飲みものなどを進める)という典型的な段階の進行があると報告している。

出会いのあいさつ行動は、会釈する－軽く手を振る－握手－肩に触れる－身体ごと抱きかかえる－キスをするなどとその親密さに応じたレベルがある。Argyle(1988)によれば、見知らぬ者同士の場合のあいさつはもっと簡単で、相互に視線を向け合う(互いを認め合う)、頭の動作(頭を相手に向ける、振るなど)、ことばによるあいさつ(時候などの)、個人的な気づかいのやりとり(近況など、タッチングはなし)の手順が見られるとしている。出会いのあいさつに対して、「別れ」のあいさつは、一般に正反対の手順が見られる。交わしていた視線をいったん外し、出口方向に身体を向け、立ち上がる準備として身体をかがめ、うなずくかのように頭を動かすというような段階を経る。出会い時に比べてその段階は厳密ではなく、往来で急に出会った場合などでは、一方が別れを切り出し、その合意が相手にないままに案外に唐突に別れにいたる場合もある。

その後の対人関係の継続性を考えるならば、一方がし向けたあいさつのレベルや量に応じた返礼を

しなければならないと言える。この意味で、同等の交換が期待される事態とも言えよう。あいさつは双方のコミュニケーションが比較的明確な段階を追って、しかも短時間になされるものであるから、送信、受信がはっきりと意識されないとその先に進み難いものであり、親密さを維持し難い。

適応的なあいさつ行動は相称的なものであり、関係の親疎・公式性を如実に反映する行動連鎖の例と言えよう。明確な段階があり、それをお互いに踏まえなければ満足できない。

ただし,あいさつのステップは無限に続くものではなく、自分が働きかけただけのステップを相手も返してくれることを期待している。それよりも多くても少なくても互いに不満を抱くことになる。あいさつ行動は、関係確認と期待の連続するコミュニケーションとも言える。

社会的スキルとしてのコミュニケーション

対人コミュニケーションを社会的スキルの重要な要因と捉え、社会的な適応を促すためのトレーニング・プログラムの開発、実践研究の進展がある(津村、1990など)。個人が他者と効果的な関係をとるためには、メッセージの記号化・解読を正確に、迅速に行わねばならない。プログラムでは、コミュニケーションの感受性を高めるよう心がけており、そのために使用チャネルの拡大、言語的行動と非言語的行動との相互依存的関係を把握することが期待される。

対人関係には過度の期待や関係についての確認不足などの問題が生じやすいものである。また、誰もが自分の価値を下げたくはない。即ち、どう行動していいか不確かでも、とにかく自分の価値を守りたい。したがって、先ず他人と自分を比べて自分の妥当性を確認し、自分を認めてくれる相手を探す。

この試みをうまくこなしていくにはいくつかの必要な要因がある。先ず自分のいる状況を正確に認知する。そして、自分の意図を適切に表現し(表出、表現)、他人のメッセージを解読す。そして、相手との関係の目的を適切にたて(方針)、それに見合う場面やツールを選ぶ。

他人との円滑な関係を築くための社会的スキルは欠かせない。そしてスキルという言葉に込められているが、ちょうどスポーツのスキルと同じようにいくつかの具体的な要因に分割できるものであり、開発、訓練できるという点は重要である。

また、Takai & Ota(1994)は、日本文化を考慮し、1. 認知能力、2. 自己抑制、3. 階層的関係管理(上下関係を気遣う行動)、4. 対人感受性(ストレートではなく気持ちを伝える)、5．曖昧さへの耐性(相手がはっきりとは気持ちを示さなくてもそれに耐えられるなどの対処能力)を含む「日本版対人的有能性尺度(JICS)」を作成している。

なお、大坊(1998)は、社会的スキルの構成要因として、1．コミュニケーション(記号化、解読)、2．察知・推測(メタ・コミュニケーション)、3．対人認知・状況理解、4．自己表現(開示・提示)の仕方、5．対人関係の調整(コントロール)、6. 社会そして組織にある文化規範・規則、7. 個人属性(パーソナリティ、社会化の程度など)にまとめている。

相手との関係の目標がなにか、文化的背景(個人中心か集団主義的文化か、主張的か、抑制・調和的行動が重視されるのかなど)などは構成要因の全体に影響する。社会規範は自己表現、調整規則に影響する。個人属性は対人コミュニケーション、自己・対人認知、自己表現、対人関係の調整に特に影響を与えるものである。このように、社会的スキルの構成要因は、広範なものであるが、その有機的な関係を捉えることによって、円滑な「社会性」を適切に考えることができる。その中心に位置づけられるのが、コミュニケーションの記号化と解読であろう(大坊,1998)。このような社会的スキルは、社会的関係を担うすべての者に必要であり、大方は現状以上の水準を願うであろう。社会的不適応にある者への治療(改善)プログラムが必要である(相川,2000)と同様に、コンパクトな日常的なモジュール作成も目指されなければな

らない。

社会的交換理論と認知的均衡理論の視点

日常の社会的生活において、われわれは、他者と様々な情報を伝達し合い、態度や反応を交換しながら、互いに影響を与え合うことによって、対人関係を形成し、展開している。この過程は、互いの持つている違いをしだいに融和させ、一体化させる方向に向かう。同時に、他者との比較においてわれわれは自分の特徴を知ることができ、また、自分を振り返りながら他者を理解できるものである。このように、他者の存在、その他者との相互作用によって展開される対人関係を具体化する過程において自己を理解し、他者への影響を及ぼし得る社会的存在となっていく。他者の存在は自分の行動のモデルとなり得るものであり、自らの行動の適否を推量するのも他者の反応に基づいてなされる。この場合、他者の存在が必ずしも自分にとって肯定的な意味を持つばかりではなく、それによって不安や悩みを惹起されることもあるが、癒し得るのも他者の存在であり、それは両価的な意味で、対人的なあつれきの交換と表現し得る。要因的に言うならば、基本的な当該の二者の他に、相互作用を持つ可能性のある状況内外の他者との関係、自分に向けられる評価をくだすであろう重要な他者(significant others)との関係も考えなければならない。社会的な交換はこのような重層的な対人関係の中に成立している。

個人間の伝達が基本であるが、個人を含む集団間においても多様に伝達されている。伝達ということ自体は、一方的な場合にも成立することではあるが、実際の社会生活においては、一方者のメッセージ伝達によって送り手、受け手の双方への影響が生じるので、伝達は、対人的な循環をなす。さらに、伝達による双方への影響の意味を考えるならば、伝えられるメッセージから受け手にとっての価値が発生し、それを享受ないし高めるために反応がなされると考えられる。この点からしても双方向の反応の連鎖が起こる。対人的な影響過程の点から、互いの行動は相手の刺激であり相手の働きかけへの反応でもあるので、それぞれの資源の交換として考えていくことができる。

例えば、ある人(A)が友人(B)に誕生日のプレゼントを贈る。その友人Bはプレゼントの意味を解読し、相手Aから向けられた好意を感じる。そして、即時とは限らないが、Aの誕生日の時に同様にプレゼントする、または、Aが恋愛関係で悩んでいる時に親身に相談にのってくれる、あるいは、他の友人との会話の中でAのやさしさを誉めて話す、などの波及性が考えられる。また、会議の席上で、Cの出した意見に対して、Dは賛成の意見を出す、Eは反対の立場を表す、Fはなんら反応しない。これらの三者の反応もそれで終わらず、CはD，E，Fに対してCの受けた支持や他者の立場の正当性を斟酌して、さらに同調したり、反論をし、あるいは別の場面でこの三者に対して異なる好意的態度をとることもあろう。このように、「交換」は、資源の種類、状況、時間、対人関係の公的さや親密さなどと多面的に関連している。

対人関係や対人行動を把握するためには要因を部分的に抽出していくというアプローチでは不足な点がある。交換行為は当該交換者の関係・時点にとどまらない広範な波及効果をもたらす。その状況としての特徴と、そこにいる者の諸特徴の全体を眺望した捉え方が必要になってくる。Figure1は、状況の構造を示したものである(Brown & Fraser,1979)。この構造の中で、セッティングや目的は概ね心理学的な研究の対象となりやすい。また、パラダイム化しやすい、実験的な設定による関係の特異さを抽出した研究もなされている(協調ー競争のゲーム論的検討や社会的ジレンマ研究など)。しかし、対人関係の含まれている“状況”の場合、相手との関係における目標が何か、その場の参加者の役割・カテゴリー関係などと社会的相互作用スタイルとの関連は、十分には明らかにされていない。また、交換の波及過程はいくつもの段階を経るものと考えられる。Cook(1971)の社会的スキルモデルに基づくと、交換の対象者の意図をどう捉えるか、その場面・状況で許容される行動の範囲はどうかが問題になる。この場

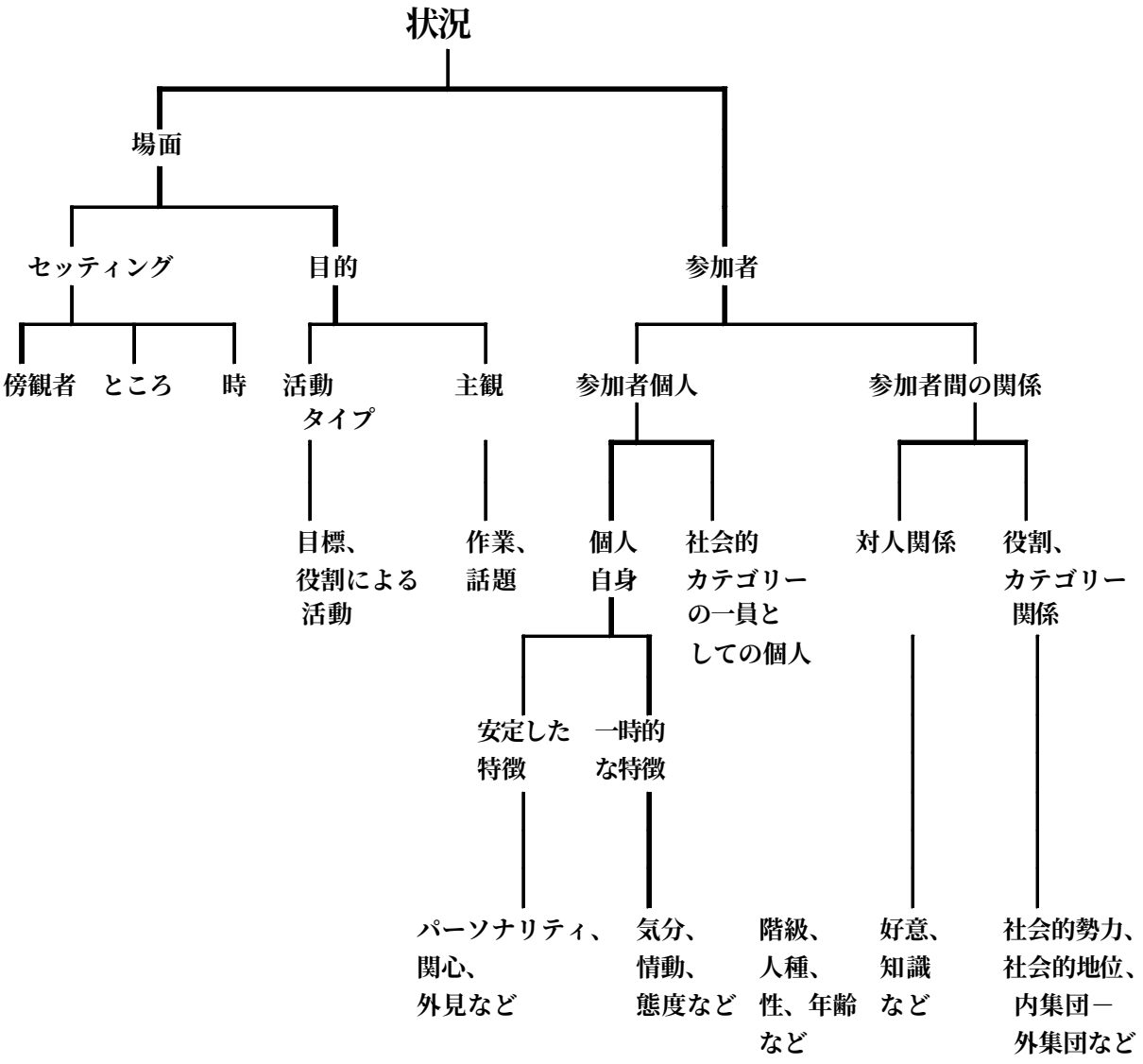

Figure 1. ***状況の構成因***
Brown & Fraser(1979) 大坊(1990)による

合、社会的な、および個人の経験によるルールによって推測がなされる。そして、相手との関係の目的などを踏まえて「相手との関係を持続する」という目標に立てば関係強化のための行動が選択され、コスト提供がなされると考えられる。例えば、ここでルールが社会的なものか個人的なものかによって個人を超えたステレオタイプな状況行動か、その個人に特異的な行動かがとられる。さらに、他者に向かう行動を考えた場合、その行動生起のための認知的枠組みが存在する。しかも、その枠組みの客観的な特性ではなく、認知された(主観的な)特性に人は左右される。Argyle のモデルは、対人認知の過程を想定しているが、その説明力は社会的行動全般に汎用可能である。

親密性平衡モデルでは、相手との間にある親密さの水準が変化すると、一種の葛藤状態となり、その状態を解決しようとする行動が生起するとしている(Argyle & Dean, 1965)。いわば緊張解消の手段としての行動変化である。均衡を指向する存在である人間の持つ一つの不均衡に由来する動機的特徴がある。しかも、その状況で使用可能なチャネルにメッセージを分配しており、あるチャネルによる表現が適

切でないと他のチャネルの変化が生じる。これは、相手との親密さの均衡が崩れたと認知した者が均衡を目指すことである。換言すれば、対人的な均衡を指向するために個人内で相補的な行動調整が行なわれることを示している。またパーソナリティの類似性の低さ、態度の不一致がコミュニケーション行動を活発化させることも知られている(Taylor,1970、Daibo,1982)。これらの事実は対人的な認知的不均衡が緊張を発生し、その低減を図るためにコミュニケーショ行動が変化することを示している。

また、一方の発言に対して同種のチャネルあるいは異種のチャネルで応答するのは、相手の存在を承認する―一種の強化子となる―であり(Matarazzo ら、1964)、同時に自分のおかれている状況を肯定するという積極的な意味を有している。送り手と受け手という役割を相互のものとして成立する対人コミュニケーションでは、相手の反応を自らへの刺激とし、自分の行動を相手への刺激となすコミュニケーションの循環性はまさしくコスト―報酬の系列と表現できる。したがって、一方が話しかけ、その相手がそれに応じなければ、開始者は、自分の働きかけ(コスト)に対する報酬を受けられないという非相称的な事態となるので反応交替の連続は滞る。たとえば自分へ向けられた視線量が多いほど、視線の送り手に対する好意度は大きい(Kleinke, et al., 1968)ことを始め、発言などについても同様の関係が多く報告されている(大坊,1986)。その一方、コミュニケーション量の飽和状態、過大な冗長性が招来されると予想されるので、対人コミュニケーションの過程をコストと報酬の連鎖とは単純に規定できない。

社会的交換を、よりマクロに経済活動の基本となる交渉過程や儀礼、贈与慣習などの社会システムとして考える視点も欠くことはできない。経済行動の原初的な一形態である物物交換は部族間や国家間の取り引き、貿易の形へと展開している。しかも、対人関係における交換は必ずしも明示的とは限らず、同種ではない多くの資源についても成立するものでもある(Turner,Foa&Foa, 1971)。したがって、社会的交換の形態は多様であり、コストと報酬の連鎖は時間的な経過をたどると考えられるので、その具体的な過程は社会的相互作用の視点から力動的に検討されなければならない。

コミュニケーションされる資源

対人関係は一方の働きかけとそれに対する他方の評価・反応(報酬)の連鎖系列で展開されている。Turner,Foa, & Foa(1971)は、交換されるもの(resource;資源)の内容に関心を寄せ、その構造及び交換されるものの適切さ、因果関係について検討している。交換される資源は具体性(concretness)―愛と金銭―、と個別性(particularism)の次元で表現できるとしている(Figure. 2)。それによれば、例えば「愛(love)」は個別性が大きく、具体性は中間的、「サービス・奉仕行為(service)」は具体性が大きく、個別性は中間的とされている。この視点を基にして、Turner らは、与えられた資源に対する返礼として選択された資源の種類とその選択強度を検討している。それによると、提供資源と同一資源が概ね最も選択されるが、愛、地位、品物についは愛が最大であり、特に愛に対する愛の選択率は最大であった。金銭については金銭とサービスが同等に並んでいる。基本的には金銭を除いて返礼として愛が選択される傾向があること、資源と同種の資源が選択される傾向があることが示されている。また、返礼として好まれる資源については、提供資源以外の種類について比較すると、品物については金銭が金銭には品物が期待されることの他に、地位とサービスについては愛が突出しており、また愛についてもサービスの割

合が大であることが特徴的であり、この両者の交換的な関連が密接なことが知られる。 これらは社会的交換の対象が必ずしも等質のものでなくとも成立すること、かつその場合にはそれぞれの提供資源に対応して選択されやすい交換資源のあることが示されている。

親密な関係における満足や持続を促す公正さを、交換される資源の種類の観点から検討した研究として増田(1991)がある。彼は、18歳から35歳の男女を被験者として、壊れた恋愛関係にあった相手に対する公正さの認識を６種類の資源の点から求めている。それによると、具体性、個別性の高い資源ほど関係の公正さに影響を与え、とりわけ愛情とサービスの影響が強く、情報と金銭資源の影響はごく低いことを報告している。

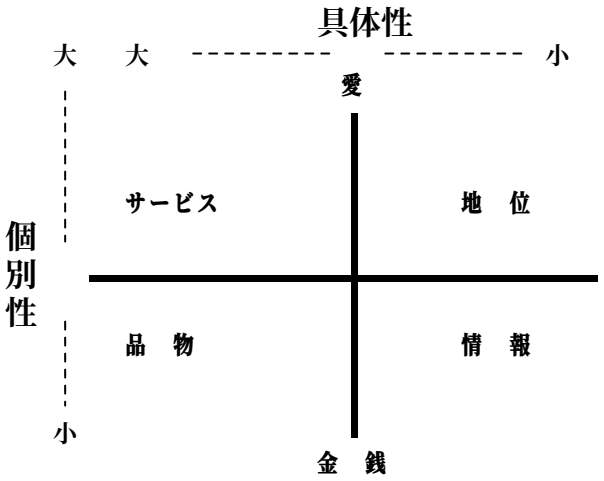

Figure 2.　対人関係で交換される資源(Turner, Foa., & Foa, **1971**)

また、高良(1991)は、親密度の異なる友人関係において資源の授受の公正さについて検討している。その結果、いずれの資源についても平等さは達成されているが、愛情と支持(地位)についての平等の達成度は、親友＞知人と異なっており、一方、金銭についてはいずれの関係でも達成度は低く違いはない。このことは、対人関係の親密さを探るための視点として、交換される資源によって関係の特質を適切に把握できるものとそうでないものとの違いがあることを示している。Turner らの資源カテゴリーの妥当性の検討を含めて交換内容に関する研究が今後さらに必要であろう。

なお、Turner ら(1971)は、資源の円環構造についての見解を示しているが、相手に向けるコスト価については述べていない。しかし、交換の資源として用いる際には、資源自体の価値とともに、その表出形態(行動様式)は重要である。具体性－個別性という次元での整理とともに実現に要する時間やより直接的に認知されるコスト価を把握しておくことも必要である。

これまでの対人コミュニケーションの研究において、いくつかの規則性が発見され、その現象を説明する理論、モデルが提出されている。得られた規則性の背景にはどのような「原理」が働いているのであろうか。Newcomb はその認知的均衡理論の中心的概念として、二者間のコミュニケーションにより成立する認知の双方向性を取り上げ、均衡過程の刺激・反応の同時性と態度予測の具体的な手がかりを示している(Newcomb ら、1965)。彼は、認知的な枠組みの中に、メッセージ伝達を相互的な関係の前提としており、この要因によって認知的安定を促進できるとしている。

コミュニケーションにおける相対性と二重の相補性

会話場面においては、多用なコミュニケーション・チャネルが用いられている。そのチャネル間の関係については、相互の関連性を示す研究が多い(Argyle & Dean,1965,大坊,1996,1998など)。視線と

発言パターンとの間に相補的関係がみられる(大坊,1982a)。しかも、会話者の不安度に高低の違いのある(不安水準の落差の有無)によって、発言と視線の活動性の方向が異なる。さらに、話者2名の共同的活動性(同時発言、相互視など)と非相称的な個人の活動性(一方だけが発言する単独発言、あるいは一方だけが相手をみる一方視)に関しても、相補的関係が見られている。即ち、不安の落差群では、共同的な活動性に関して発言は活発であるが、視線は不活発である。個人の活動性に関しては発言は不活発になるが、視線は活発であるという二重の相補的関係がみられる。不安の一致群は、これと逆の関係を示している(不安の discrepancy 活性化モデル,Daibo,1982,大坊,1996参照)。

ここに、発言と視線の相補性、及び対としての共同的な活動性と個人レベルでの活動性との相補性、いわゆる二重の相補的関係があると考えられる。

Argyle&Dean(1965)の述べた親密性平衡モデルに意味されている相補性は、視線と距離などの特定のチャネル間のみならず、コミュニケーション手段全体に関しても成立すると考えられる。

この関係が示されるのは、社会的な事態でのことであるが、個人内での一種の均衡指向のメカニズムであることを示しているのではなかろうか。ミクロに表現するならば、個人内生理レベルでのホメオスタシス、対人関係の認知について認められる認知的均衡理論に共通するメカニズムが想定される。

また、同時に集団・社会行動を捉えていくためにも対人的な事態、対人関係全体を一つのシステムとして捉える必要がある。

共感性あるいは、相手との親密度が高いと相手のコミュニケーション・パターンと近似性が高まる現象がある(後述の同調傾向)。しかしながら、このような変化は、無限に直線的に高まるのではない。当該の関係において、コミュニケーション量は一定(限定される)である。したがって、一方の発言が活発であれは、相手の発言は抑制されるというような対人的なレベルでの相補的関係が成り立つ。発言と視線の相補的関係、そして、大坊(1982b)にあるように、男女間の会話では男性の発言は活発であり、相手の女性では視線が活発であるということからも、対人関係の要因を介して、相補的関係は高度に認められる。チャネル間の相補性は個人内に生ずる均衡指向の傾向であると考えられる。

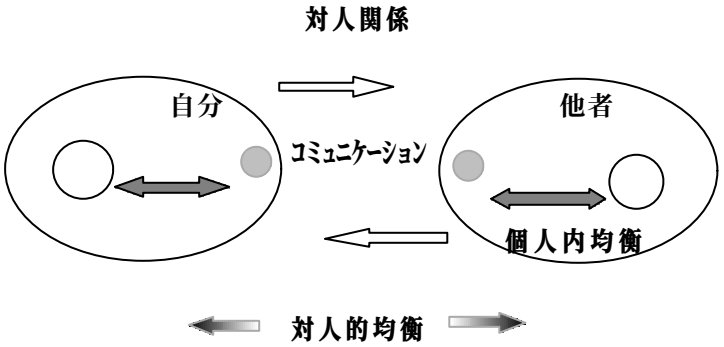

Figure 3. 個人内均衡と対人的均衡との二重の相補性 (大坊,1982c)

いわば、個人内と個人間の二重の均衡を求める相補的関係が存在していると考えていいであろう。Figure3.は、この関係を示したものである(大坊,1982c)。ただし、個人内の均衡と個人間の均衡がうまく合致せず、相容れないこともあり得る。認知的ないし、コミュニケーションの分解的な(dissociative)傾向もある。この事実自体も、概ねこの個人内の均衡にウエイトをおくこととして考えられる。

日常的な場面では個人内の均衡ないし個人間の均衡に重みをおきながら、何らかの社会的行動がとられている。しかし、この2種類の均衡はある意味では異なる様相を示すと考えられる。
いずれ矛盾をきたしうるので、認知的変換(歪曲)なり、あるいは抑圧も起こるであろう。

人間が、自分の行動ルールについて、あるいは自分のおかれている状況、あるいは関係について均

衡を指向するということは、様々な様相において共通的に認められると思われる。さらに、これらのことは、人間は対人場面においてきわめて相対的な存在であること示している。例えばFiedlerのリーダーシップについての条件即応モデルに見られる個人と状況との交互作用的な相対性なども、関連する視点にあると言えよう。

対人コミュニケーションと認知過程はきわめて密接な関係にあると考えられる。多くの研究においてコミュニケーション・パターンと対人認知との対応も確認されている。対人認知はコミュニケーションと同様に循環的ループを辿るものと考えられる。他者の認知というものは、対象者自体ではなく、対象者に由来するイメージと対人関係ー具体的にはコミュニケーション過程ーを通じて獲得される一種のフィードバック的なイメージとの融合した所産と言える。

この認知は、個人の不安特性と関係していることも報告されている(大坊、1981)。その結果によると、対人認知の正確さは、低不安者は大であり、高不安者は相手の不安水準を過大評価する傾向にある。それを会話対の組み合せ条件で比較すると、高低の不安水準類似群はいずれも認知が正確になされている。即ち、不安の一致群には、認知の正確さ、安定さが認められた。このように、個人のパーソナリティ特徴が、「不安のdiscrepancy」の有無の条件で、交互作用的な結果をもたらしている。

社会的行動は多数の要因によって複合的に影響されている。そして、単一の次元では予想しえないような力動的な特徴が現れてくる。容易には要因としては抽出し難いことではあるが、可能な限り複合的な指標を設定して研究する必要がある。

コミュニケーションのマッチング：同調傾向

対人関係の影響を受けて、時間経過にともなって、コミュニケーションのパターンが相手の示すパターンに近似していく現象がみられる。自分の発言に対して相手が応じることは、自分への関心や評価の表れとして捉えられ、満足をもたらす。このような相互依存の過程を示す現象として、一方の発言量が長く(短く)なると、相手の発言量も連動して増減する事実がある。具体的には、発言時間、沈黙の頻度、発話速度、音声の強さ、アクセント、身体動作などで確認されている(身体動作については、反響動作とも名づけられている。Morris, 1977)。Matarazzo& Wiens(1972)は、これを同調傾向(synchronytendency)と名づけた。Condonら(Condon & Ogston,1967など), Kendon(1970)は話者自身の身体各部位の動きの連動と同時に聞き手も話者の発話の進行に応じて身体動作が対応することを、また、心理療法場面でのセラピストとクライエントの姿勢が一致することを、Charny(1966)が報告している。

宇宙飛行士と地上の連絡員との交信の場合の発言時間(Matarazzo, Wiens, Saslow, Dunham, Voas, 1964)、大統領の記者会見時にも、記者の質問量(文章数)と大統領の答弁量との間にも同様に同調傾向が認められている。これらの結果を基にして、Matarazzoらは、発話相手によって違いはあるが、発言量には一定の比例関係を保つ傾向があると考えている。そしてこれを言語的相互作用比(Verbal interaction constant)と名づけ(Matarazzo, Hess, & Saslow, 1962)、就職時の面接では求職者：雇用者では5:1、大統領：記者では2.7:1、宇宙飛行士：連絡員では1.2～2.4：1という値を示している。

この現象の成立のメカニズムについて、Matarazzoらは社会的なモデリングとオペラント的な強化の点から説明している。発話者にとって、実験的な場面、面接場面は経験の乏しい新奇な状況であり、効果的な行動の仕方について知り得ていない。そのために、相互作用の相手(面接者など)の行動を模倣することによって、自分の行動の枠組みを得ようと試みる。さらに、被面接者が発言すると面接者がそれに応答する。その応答は被面接者にとっては自分への関心の高まりとして認知し、心理的に満足する

(一種の報酬となる)。それが被面接者の発言を強化し、さらに発言行動が増大するというものである。これを、“greater-satisfaction-in-the-presence-of-greater-interviewer-activity 仮説”とも名づけている(Matarazzo & Wiens, 1972, p95)。

しかし、自分の発言と面接者の発言をコストと報酬の連鎖と考えると、コミュニケーション量の上限が問題となるであろう。一方の発言量の増加が相手の発言量を同様に増すとしても必ず冗長さを高めることになり、際限なく直線的な平行性を維持しはしない。相づちなどによる発言の促進も同様である。相互の発言の交代による発言時間の増大と会話者の満足度とが一次的な関数関係にあるかどうかは厳密には検討されていない。

なお、自他関係の認知が斉合しない場合や精神障害者では、二者のパターンが異なる方向へ変化する負の同調傾向が見られることを報告されており(大坊,1977,1985)、コミュニケーション自体には正の同調傾向を前提とはできない。むしろ、その事態の対人関係の特徴を鋭敏に反映する現象といえよう。したがって、関係の進展の方向性を示唆する指標ともなろう。

関係の持続を望むならば、相手の発言に対応した変化が見られるであろうが、そうでなければタイミングのずれた反応が示されるであろう。また、コミュニケーションの連鎖からすれば、負の同調傾向も建設的な意味をもつこともあると考えられる。一方が相手に対して好意的な感情を抱き、相手の発言が活発な場合はどうであろう。相手の発言を容認し、聞き手に徹するならば、負の同調が起こることが十分に考えられる。このように会話者間の認知的均衡が、この現象に作用する大きな要因であると考えられる。

同調傾向は、2つの側面からとらえることができる。第1は、話者の言語活動パターンが時間経過とともに類似し、正の相関関係が高まる傾向としてであり、第2は、話者の言語活動水準が近似した値へと収束して差が減少する傾向である(Welkowitz & Kuc,1973)。この現象は、共感性、対人的暖かさ、社会化能力などと関係するものであり、相手との関係を進展させることと関連している(大坊,1985)。

Condon & Ogston(1967)、Condon & Sander(1974)は、話し相手の声に、聞き手の身体動作が一致して反応する現象に着目し、これを“interactional synchrony(あるいは、entrainment)”と名づけている。Condon とSander(1970)は、おとなの話しかけ(母国語以外の他の外国語にも)に応じて、新生児の身体動作が生ずることを示している。この時期における新生児の反応は目的的とは言い難いが、概ねリズミックな動きである。これに対して、母音だけでは自然で、リズミックな応答は示されていない。さらに、このような母子間の同調現象で得られた音声と身体動作の対応リズム(波形分析による)と、成人の会話(音声とうなづき)での結果と類似したパターンを示すことも知られている(渡辺・石井・小林、1984)。

また、やまだ(1996)は、この母子間に見られる同調を示すコミュニケーションを互いに共鳴して「うたう」かのような共同体としての現象として捉えている。両者の送受信は高度に共鳴し、他者が介入しにくい濃密で、要素的には分解しがたい全体性をなしているとしている。自他の識別を前提としない融合的世界から発して、しだいに共振することによって身体としての自分と鏡映的な他者を認識し、世界を変えていくことに通じる必然的現象として理解できる。さらに、ブッシュマンの社会において、採集、日常的な協同作業(獲物の解体作業、家屋建築時の作業など)などの場面で参加者の一連の行動が互いに同期することも観察されている(今村,1996)。今村は、『かれらの同調的な相互行為は、『個人の行動が、他の人々に波及的に広がる』というような個人を出発点としたものというより、すでに人々に共有されている気分が、なにかをきっかけに表出し、響き合うといったものである。」と述べている(p.87)。

同調傾向は乳児期から、そして多様な対人関係において広範に認められることから、Hall(1966)はこれを、対人コミュニケーションを続けること自体に含まれる「固有の対人的リズム」であると述べている。このように、同調傾向は、同一チャネルに見られるミクロな連動現象から、マクロな一連の行動の連鎖についても認められるものである。社会的関係を築く原初的起源となるコミュニケーションを示しているかの

ようにも思われる。社会的存在である人間が、自分の身体を用いて示す「共振」現象と言える。あたかも、ある源から発した振動波が周囲にある同種の事物の振動を促すことと同様に。意図性がないかごく低いことからしても、ア・プリオリに他者を考慮し、社会的関係の構築に向かう内発性を示すものであろう。

対人コミュニケーションの社会性

対人コミュニケーションには次のようなメカニズムが働いていると考えられる。先ず、個々のメッセージの交換は発信者にとってはコストをかけた行為であり、受け手にとっては自分への関心、承認となる性質を持つので報酬となり得る。したがって、コミュニケーションの直接性(immediacy)は強化因子として働くと言える。このように、ミクロな視点ではメッセージの応答は社会的な交換過程と見なしうる。メッセージの交換とは定性的な表現ではあるが、コミュニケーションを量的に表現できること、しかも、たとえば親密性平衡モデルの主張にあるように、親密さを表現する場合に異種類のチャネルによる代替が可能である。したがって、コミュニケーション・チャネルの違いによる強化・報酬価値を測定できることになろう。

しかし、社会交換理論では環境的な全体の布置を必ずしも考慮せずに要素的に時点を取り出して交換行為を問題としてきたきらいがある。個々のメッセージ交換は時系列となり、歴史的事実となる。個々の交換行為を基礎としながら、当該の対人関係に相応する定常的なシステムをなそうとしているとも言える。即ち、そこに一定の内部的な収れん力を持つ固定的な状態が目指されると考えられる。この目標が均衡状態である。さらにこの均衡は階層性を持つものであり、個人内部の一貫性を保持するために指向される均衡(個人内均衡)と対人関係を主とする社会的環境との調和を図る対人的均衡とがある。後者は社会的存在として内在するホメオスタシスとして捉えることもできよう。この例は、儀礼的な贈与の慣習であるポトラッチの制度にも見ることができる(アメリカインディアンに見られる饗宴の主催であり、自分の持っている財を無条件に提供することによって、他者に対する威信を維持するものである。青井,1980)。このような「持てるもの」を放出する行動は、コスト－報酬の交換とは言えず、「社会」全体の均衡を指向する現象の一つと言えよう。この非相称的な贈与の習慣は、その意味を拡大すれば、規範的等価性を抽出できるかも知れないが、社会システムを保持するという均衡指向の行為である。即ち、個々の交換行為の連鎖は上位の社会システムの全体的布置の中に含まれており、さらに時系列の中でプロセスとなる。家庭内での親から子へのプレゼントは子への強化の意味を持ち得るが、財の移動は家庭を出ることはなく、また、養育過程において親が子にかけるコストは一方的なものであり、衡平性を欠く。しかし、提供する(できる)ことの有用感による満足や、与えられたコストを子が享受し、成長すること自体への期待感は異なる資源間での交換を示すものでもあろう。さらに、当該時点を超えた過程に生じる満足感もまた、個々の交換を超えた社会システムの均衡の例と言えよう。

このような経過で達成された均衡状態は実は必ずしも定常ではない。現実には変化を含んだ力動性が存在している。その内部のシステムでは個々の交換行為に伴って、他者認知の過程が進行している。獲得された均衡状態にしたがって、認知された他者情報を修正、補強しようとする、一種の対人関係の質の変化が起こる。この認知的検討の段階において、さらに高度な均衡への動機が生じると考えられる。したがって、対人関係段階の進展に伴ってコミュニケーションの持つ機能自体も変容していくと考えられる。ただし、このような均衡から不均衡への変化の過程はコミュニケーション行動についてもこれまで十分に検討されていない。個々の交換行為の連鎖としての事実からのみではなく、環境の全体的布置の視点からコミュニケーション過程をシステムとして捉えるアプローチとの接合点を探らなければならない。

引用文献

相川 充 (2000) 人づきあいの技術ー社会的スキルの心理学ー. サイエンス社.

青井和夫 (1980) 小集団の社会学. 東京大学出版会.

Argyle,M. (1988) *Bodilycommunication.Seconded*. London:Methuen&Co.

Argyle,M.,&Cook,M.(1976) *GazeandMutualGaze*.Chambridge:ChambridgeUniversityPress.

Argyle,M.,&Dean,J.(1965) Eyecontact, distanceandaffiliation. *Sociometry*, **28**,289-304.

Brown,P.,&Fraser,C.(1979) Speech as a marker ofsituation. In K.R.ScererandH.Giles(Eds.) *Socialmarkersinspeech*.CambridgeUniversityPress.

Charny,E.J.(1966) Psychosomaticmanifestations of rapport in psychotherapy. *PsychosomaticMedicine*, **28**,305-315.

Condon,W.S.,&Ogston,W.D.(1967) A segmentationofbehavior. *JournalofPsychiatric Research*, **5**, 221-235.

Condon,W.S.,&Sander,L.W.(1974) Neonatemovementissynchronizedwithadultspeech:Internationalparticipationandlanguageacquisition. *Science*, **183**, 99-101.

Cook,M. (1979) *Perceivingothers:ThePsychology of interpersonalperception*. London:Methuen.

Daibo,I.(1982)Theroleofanxietytraitandcommunicationmediumindyadicconversation. InH. Hiebsch(Ed.) *Social Psychology:XXIIndInternational CongressofPsychologySelectedRevised Papers*.North-Holland. *Pp*.188-194.

大坊郁夫 (1977) ２人間コミュニケーションにおける言語活動性の構造. 実験社会心理学研究, **17**,1-13.

大坊郁夫 (1981) 対面的会話事態におけるパーソナリティ認知の構造 日本グループ・ダイナミックス学会発表論文集,8-9.

大坊郁夫 (1982a) 二者間相互作用における発言と視線パターンの時系列構造. 実験社会心理学研究, **22**,11-26.

大坊郁夫 (1982b) 異性間のコミュニケーションと対人魅力. 日本社会心理学会第 23 回大会研究発表論文集, 29-30.

大坊郁夫 (1982c) 実験社会心理学の立場から. 日本社会心理学会第 23 回大会特別テーマセッション「実証研究の背後にある人間」記録集, *Pp*.11-18.

大坊郁夫 (1985) 対人的コミュニケーションにおける同調傾向ー主に音声的行動についてー. 山形心理学レポート, **4**,1-15.

大坊郁夫 (1986) 対人行動としてのコミュニケーション.(対人行動学研究会編 1986 対人行動の心理学、第 9 章、*Pp*.193－224, 誠信書房)

大坊郁夫 (1990) 対人関係における援助. 北星学園大学文学部北星論集, **27**, 261-278.

大坊郁夫 (1996) 顕現性不安の対人的影響. 杉山善朗教授退職記念論文集, 169-177.

大坊郁夫 (1998) しぐさのコミュニケーションー人は親しさをどう伝えあうかー. サイエンス社

大坊郁夫 (1999) あいさつ行動と非言語的コミュニケーション. 國文學,**44(6)**,28-33.

Duncan, S.D.,Jr.(1969) Nonverbal communication. *PsychologicalBulletin*, **72**, 118-137.

Ekman, P.,&Friesen,W.V.(1969) The repertoireofnonverbalbehavior:Categories, origins,usages, and coding. *Semiotica*, **1**, 49-98.

ホール、E.T. (日高敏隆・佐藤信行訳 1970) かくれた次元. 東京：みみず書房.(Hall,E.T.1966 *Thehidden dimension*. New York:Doubleday&Company.)

今村 薫 (1996) 同調行動の諸相ーブッシュマンの日常生活からー(菅原和孝・野村雅一編 コミュニケーションと

しての身体. *Pp*.71-91, 大修館書店)

Kendon,A.(1970) Movement coordination in social interaction : Someexamples described. *Acta Psychologica*, **32**, 101-125.

Kendon,A.,&Ferber,A.(1973) A descriptionofsomehumangreetings.(InMichael,R.P.,&J.H. Crook(eds.) *Comparativeecology and behaviourofprimates*, *Pp*.591-668.London:Academic Press.

Kleinke, C. L.,Staneski,R.A.,&Berger,D.E.(1968) Evaluation ofaninterviewerasafunctionof interviewergaze,reinforcement of subject gaze,andinterviewer attractiveness. *Journal of PersonalityandSocialPsychology*, **31**,115-122.

MacKay,D.M.(1972) Formalanalysisofcommunicativeprocesses.InR.A.Hinde(ed.), *Nonverbal Communication*. Cambridge:CambridgeUniversityPress. *Pp*.3-25.

増田匡裕 (1991) 恋愛関係におけるEquity の認知が持続期間及び集結後の態度に与える影響. 日本グループ・ダイナミックス学会第 39 回大会発表論文集, 49-50.

Matarazzo,J.D.,&Wiens,A.N.(1972) *TheInterview:Researchonitsanatomyandstructure*. Chcago:Aldine・Atherton

Matarazzo,J.D.,Hess,H.F.,&Saslow,G.(1962) Frequencyandduration characteristics of speech and silencebehaviorduringinterviews. *Journalofclinical Psycho- logy*, **18**, 416-426.

Matarazzo,J.D.,Saslow,G.,Wiens,A.N.,Weitman,M.,&Allen,B.V.(1964) Interviewerhead nodding and intervieweespeechdurations. *Psychotherapy:Theory, ResearchandPractice*, **1**, 54-63.

Matarazzo,J.D.,Wiens,A.N.,Saslow,G.,Dunham,R.M.,&Voas,R.B.(1964)Speechdurationsofa stronaut andgroundcommunicator. *Science*, **143**,148-150.

Morris, D.(1977) *Manwatching*. ElseverPub.(藤田 統(訳) 1980 マンウォツチング. 小学館)

Newcomb,T.M.,Turner,R.H.,&Converse,P.E.(1965) *Social Psychology:Thestudyofhuman interaction*.Holt,Rinehart&Winston.(古畑和孝(訳)1973 社会心理学 ― 人間の相互作用の研究. 岩波書店)

Patterson, M.L.(1976) Anarousalmodelofinterpersonalintimacy. *PsychologicalReview*, **83**,235-245.

Patterson, M.L.(1982) Asequentialfunctionalmodelofnonverbalexchange. *PsychologicalReview*, **89**, 231-249.

Patterson,M.L. (1983) *Nonverbal behavior:Afunctionalperspective*.NewYork:Springer-Verlag.

Rosenthal,R.(1966) *Experimentereffects inbehavioralresearch*. Appleton-Century-Crofts.

Scheflen, A. E.(1968)Humancommunication:Behavioralprogramsandtheirintegrationininter- action. *Behavioral Science*, **13**,44-55.

菅原和孝 (1996) コミュニケーションとしての身体.(菅原和孝・野村雅一編 コミュニケーションとしての身体 *Pp*. 8-38, 大修館書店)

Takai,J.,&Ota, H.(1994) AssessingJapaneseinterpersonalcommunication competence. *Japanese Journal ofExperimentalSocialPsychology*, **33**, 224-236.

高良美樹 (1991) 友人関係における資源別相互作用過程. 日本グループ・ダイナミックス学会第 39 回大会発表論文集,61-62.

Taylor, H.F.(1970) *Balancein small groups*. VanNostrandReinholdComp.

津村俊充 (1990) 体験集団における相互作用過程.(大坊郁夫・安藤清志・池田謙一編 社会心理学パースペクティブ 2 ―人と人とを結ぶとき―, 第5 章, *Pp*. 89-110, 誠信書房)

Turner, J. L.,Foa,E.D.,&Foa,U.G.(1971) Interpersonal reinforcers:Classification, interrelation-

ship,andsomedifferentialproperties. *Journal of PersonalityandSocialPsychology*, **19**,168-188.
Welkowitz,J.,&Kuc,M. (1973) Interrelationships among warmth,genuiness, empathyandtemporal speechpatternsininterpersonalinteraction. *Journal ofConsulting and clinicalPsychology*, **41**, 472-473.
やまだようこ (1996) 共鳴してうたうこと・自身の声がうまれること(菅原和孝・野村雅一編 コミュニケーションとしての身体. *Pp*. 40-70, 大修館書店)

The social meaning of interpersonal communication

Daibo, Ikuo(Graduate SchoolofHumanSciences, OsakaUniversity)

The interpersonalrelationshipsare developed by meansofvarious media in social context including temporal sequence. Communicative acts convey psychologicalmessages derived from socialnormandcultural products. The domain ofcommunicative studiesareenlarged from theusageofnonverbal channels revealing body-parts to the understandingfunctional integrationof multiple channels. Interpersonalcommunication is consideredasthetemporal sequenceofsocialexchangesbetween personsandis regarded as theprocess of developingthe balanced interpersonalrelationshipsof bondingpersonseach other. Thebalanced state is notultimately stable, but, isbecoming to getstill more stable. It isnecessary to study the rationalrelationshipsbetween the intrapersonalbalance and theinterpersonal balance. The dual-stage of interpersonalbalance andtheevidencesofsynchronytendencyin many non-verbalchannelsshouldevokethecontroversy betweenthestructuralapproachandthecom-ponent approach considering social meaning of communication.

Key words : interpersonal communication, cognitivebalance, social exchange, social skills, synchronytendency